第1問　次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 19 の番号を付してある。(配点　50)

1 「これから話す内容をどの程度理解できたか、後でテストをする」

2 授業の冒頭でこう宣言されたら、受講者のほとんどは授業内容の暗記をこころがけるだろう。後でテストされるのだ、内容をちゃんと憶えられたか否かで成績が評価されるのである。こうした事態に対応して、私たちは憶えやすく整理してノートを取る、用語を頭の中で繰り返し唱える、など、暗記に向けた聴き方へと、授業の聴き方を違える。これは学習や教育の場のデザインのひとつの素朴な例である。

3 講義とは何か。大きな四角い部屋の空気のふるえである。または教室の前に立った、そしてたまにうろつく教師のモノローグである。またはごくたまには、目前の問題解決のヒントとなる知恵である。講義の語りの部分にだけ注目してみても、以上のような多様な捉え方が可能である。世界は多義的でその意味と価値はたくさんの解釈に開かれている。世界の意味と価値は一意に定まらない。**A** 講義というような、学生には日常的なものでさえ、素朴に不変な実在とは言いにくい。考えごとをしているものにとっては空気のふるえにすぎず、また誰かにとっては暗記の対象となるだろう。

4 冒頭の授業者の宣言は授業の意味を変える。すなわち授業のもつ多義性をしぼり込む。空気のふるえや、教師のモノローグを、学生にとっての「記憶すべき一連の知識」として設定する作用をもつ。授業者の教授上の意図的な工夫、または意図せぬ文脈の設定で、その場のひとやモノや課題の間の関係は変化する。ひとのふるまいが変化することもある。呼応した価値を共有する受講者、つまりこの講義の単位を取りたいと思っている者は、聞き流したり興味のある箇所だけノートしたりするのでなく、後の評価に対応するためまんべんなく記憶することにつとめるだろう。

5 本書(注2)ではこれまで、さまざまなフィールドのデザインについて言及してきた。ここで、本書で用いてきたデザインという語についてまとめてみよう。一般にデザインということばは、ある目的を持ってイ(ア)ショウ・考案・立案すること、つまり意

図的に形づくること、と、その形づくられた構造を意味する。これまで私たちはこのことばを拡張した意味に用いてきた。ものの形ではなく、ひとのふるまいと世界のあらわれについて用いてきた。

6 こうした意味でのデザインをどう定義するか。デザインを人工物とひとのふるまいの関係として表した新しい古典、ノーマン(注3)の『誰のためのデザイン』の中を探してみても、特に定義は見つからない。ここではその説明を試みることで、私たちがデザインという概念をどう捉えようとしているのかを示そうと思う。

7 辞書によれば「デザイン」のラテン語の語源は〝de signare〟つまり〝to mark〟、印を刻むことだという。人間は与えられた環境をそのまま生きることをしなかった。自分たちが生きやすいように自然環境に印を刻み込み、自然を少しずつ文明に近づけていったと考えられる。それは大地に並べた石で土地を区分することや、太陽の高さで時間の流れを区分することなど、広く捉えれば今ある現実に「人間が手を加えること」だと考えられる。

8 私たちはこうした自分たちの活動のための環境の改変を、人間の何よりの特徴だと考える。そしてこうした環境の加工を、デザインということばで表そうと思う。デザインすることはまわりの世界を「人工物化」することだと言いかえてみたい。自然を人工物化したり、そうした人工物を再人工物化したりということを、私たちは繰り返してきたのだ。英語の辞書にはこのことを表すのに適切だと思われる〝artificialize〟という単語を見つけることができる。アーティフィシャルな、つまりひとの手の加わったものにするという意味である。

9 デザインすることは今ある秩序(または無秩序)を変化させる。現行の秩序を別の秩序に変え、異なる意味や価値を与える。例えば本にページ番号をふることで、本には新しい秩序が生まれる。それは任意の位置にアクセス可能である、という、ページ番号をふる以前にはなかった秩序である。この小さな工夫が本という人工物の性質を大きく変える。他にも、一日の時の流れを二四分割すること、地名をつけて地図を作り番地をふること、などがこの例である。こうした工夫によって現実は人工物化／再人工物化され、これまでとは異なった秩序として私たちに知覚されるようになる。冒頭の例では、講義というものの意味が再編成され、「記憶すべき知識群」という新しい秩序をもつことになったのである。

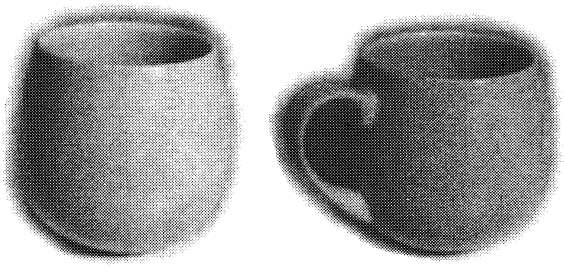

図1　持ち手をつけたことでの
アフォーダンスの変化

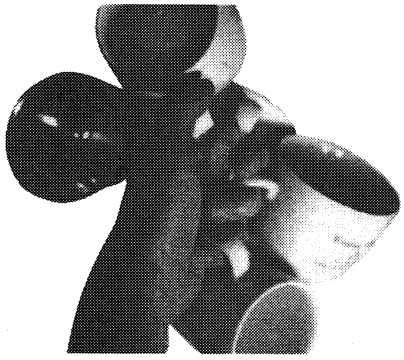

図2　アフォーダンスの変化による
行為の可能性の変化

10 今とは異なるデザインを共有するものは、今ある現実の別のバージョンを知覚することになる。あるモノ・コトに手を加え、新たに人工物化し直すこと、つまりデザインすることで、世界の意味は違って見える。例えば、**B**図1のように、湯飲み茶碗に持ち手をつけると珈琲カップになり、指に引っ掛けて持つことができるようになる。このことでモノから見て取れるモノの扱い方の可能性、つまりアフォーダンスの情報が変化する。

11 モノはその物理的なたたずまいの中に、モノ自身の扱い方の情報を含んでいる、というのがアフォーダンスの考え方である。鉛筆なら「つまむ」という情報が、バットなら「にぎる」という情報が、モノ自身から使用者に供される(アフォードされる)。バットをつまむのは、バットの形と大きさを一見するだけで無理だろう。鉛筆をにぎったら、突き刺すのには向くが書く用途には向かなくなってしまう。

12 こうしたモノの物理的な形状の変化はひとのふるまいの変化につながる。持ち手がついたことで、両手の指に一個ずつ引っ掛けるといっぺんに十個のカップを運べる。

13 ふるまいの変化はこころの変化につながる。たくさんあるカップを片手にひとつずつ、ひと時に二個ずつ片付けているウェイターを見たら、雇い主はいらいらするに違いない。持ち手をつけることで、カップの可搬性が変化する。ウェイターにとってのカップの可搬性は、持ち手をつける前と後では異なる。もっとたくさんひと時に運べるそのことは、ウェイターだけでなく雇い主にも同時に知覚可能な現実である。ただ単に可搬性にだけ変化があっただけではない。これらの「容器に関してひとびとが知覚可能な現実」そのものが変化しているのである。

14 ここで本書の内容にかなったデザインの定義を試みると、デザインとは「対象に異なる秩序を与えること」と言える。デザインには、物理的な変化が、アフォーダンスの変化が、ふるまいの変化が、こころの変化が、現実の変化が伴う。例えば私たちははき物をデザインしてきた。裸足(はだし)では、ガレ場(注4)、熱い砂、ガラスの破片がちらばった床、は怪我(けが)をアフォードする危険地帯で(イ)フみ込めない。はき物はその知覚可能な現実を変える。私たち現代人の足の裏は、炎天下の浜辺の(ウ)カワいた砂の温度に耐えられない。これは人間というハードウェアの性能の限界であり、いわばどうしようもない運命である。その運命を百円のビーチサンダルがまったく変える。自然の(エ)セツリが創り上げた運命をこんな簡単な工夫が乗り越えてしまう。はき物が、自転車が、電話が、電子メールが、私たちの知覚可能な現実を変化させ続けていることは、その当たり前の便利さを失ってみれば身にしみて理解されることである。そしてまたその現実が、相互反映的にまた異なる人工物を日々生み出していることも。

15 私たちの住まう現実は、価値中立的な環境ではない。文化から生み出され歴史的に(オ)センレンされてきた人工物に媒介された、文化的意味と価値に満ちた世界を生きている。それは意味や価値が一意に定まったレディメイドな世界ではない。文化や人工物の利用可能性や、文化的実践によって変化する、自分たちの身の丈に合わせてあつらえられた私たちのオーダーメイドな現実である。人間の文化と歴史を眺めてみれば、人間はいわば人間が「デザインした現実」を知覚し、生きてきたといえる。**C**このことは人間を記述し理解していく上で、大変重要なことだと思われる。

16 さてここで、あるモノ・コトのデザインによって変化した行為を「行為(こういダッシュ)」と呼ぶこととする。これまでとは異なる現実が知覚されているのである。もはやそこは、このデザイン以前と同じくふるまえるような同じ現実ではないのである。そうした現実に対応した行為にはダッシュをふってみよう。例えば、前後の内容を読んで、本の中から読みかけの箇所を探す時の「記憶」・「想起」と、ページ番号を憶えていて探し出す時の「記憶」とでは、その行いの結果は同じだがプロセスはまったく異なる。読み手から見た作業の内容、掛かる時間や手間はページ番号の有無でまったく異なる。読みさしの場所の素朴な探し出しが昔ながらの「記憶」活動ならば、ページ番号という人工物に助けられた活動は「記憶(きおくダッシュ)」活動というこ

とだ。台所でコップを割ってしまったが、台所ブーツをはいているので破片を恐れずに歩くのは、もうそれまでの歩行とは違う「歩行」。「今日話す内容をテストする」、と言われた時の受講者の記憶は「記憶」。人工物化された(アーティフィシァライズされた)新たな環境にふるまう時、私たちのふるまいはもはや単なるふるまいではなく、「デザインされた現実」へのふるまいである。

17 買い物の際の暗算、小学生の百マス計算での足し算、そろばんを使った足し算、表計算ソフトでの集計、これらは同じ計算でありながらも行為者から見た課題のありさまが違う。それは「足し算」だったり「足し算」だったり「足し算」……する。ただし、これはどこかに無印(むじるし)の行為、つまりもともとの原行為とでも呼べる行為があることを意味しない。原行為も、文化歴史的に設(しつら)えられてきたデフォルト(注5)の環境デザインに対応した、やはり「行為」であったのだと考える。ページ番号がふられていない本にしても、それ以前のテキストの形態である巻き物から比べれば、読みさしの箇所の特定はたやすいだろう。人間になまの現実はなく、すべて自分たちでつくったと考えれば、すべての人間の行為は人工物とセットになった「行為」だといえるだろう。

18 人間は環境を徹底的にデザインし続け、これからもし続けるだろう。動物にとっての環境とは決定的に異なる「環境(かんきょうダッシュ)」を生きている。それが人間の基本的条件だと考える。ちなみに、心理学が批判されてきた／されているポイントは主にこのことの無自覚だと思われる。心理学実験室での「記憶(きおくダッシュ)」を人間の本来の「記憶(むじるしきおく)」と定めた無自覚さが批判されているのである。

19 **D** 「心理 学(しんりダッシュがく)」の必要性を指摘しておきたい。人間の、現実をデザインするという特質が、人間にとって本質的で基本的な条件だと思われるからである。人間性は、社会文化と不可分のセットで成り立っており、ヴィゴツキー(注6)が主張する通り私たちの精神は道具に媒介されているのである。したがって、「原心理」なるものは想定できず、これまで心理学が対象としてきた私たちのこころの現象は、文化歴史的条件と不可分の一体である「心理 学」として再記述されていくであろう。この「心理 学」は、つまり「文化心理学」のことである。文化心理学では、人間を文化と深く入り交じった集合体の一部で

あると捉える。この人間の基本的条件が理解された後、やがて「′」は記載の必要がなくなるものだと思われる。

（有元典文（ありもとのりふみ）・岡部大介（おかべだいすけ）『デザインド・リアリティ――集合的達成の心理学』による）

（注）
1 モノローグ――独り言。一人芝居。
2 本書ではこれまで、さまざまなフィールドのデザインについて言及してきた。――本文より前のところで、コスプレや同人誌など現代日本のサブカルチャーが事例としてあげられていたことを受けている。
3 ノーマン――ドナルド・ノーマン（一九三五～　）。アメリカの認知科学者。
4 ガレ場――岩石がごろごろ転がっている急斜面。
5 デフォルト――もともとそうなっていること。初期設定。
6 ヴィゴツキー――レフ・ヴィゴツキー（一八九六～一九三四）。旧ソ連の心理学者。

問1　傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5 。

(ア) イショウ 1
① コウショウな趣味を持つ
② 演劇界のキョショウに会う
③ 出演料のコウショウをする
④ 課長にショウカクする
⑤ 戸籍ショウホンを取り寄せる

(イ) フみ 2
① 株価がキュウトウする
② 役所で不動産をトウキする
③ 前例をトウシュウする
④ ろくろでトウキをつくる
⑤ 飛行機にトウジョウする

(ウ) カワいた 3
① 渋滞をカンワする
② 新入生をカンゲイする
③ 難題にカカンに挑む
④ 浅瀬をカンタクする
⑤ カンデンチを買う

(エ) セツリ 4
① 電線をセツダンする
② 予算のセッショウをする
③ セットウの罪に問われる
④ セツジョクをはたす
⑤ 栄養をセッシュする

(オ) センレン 5
① センリツにのせて歌う
② センジョウして汚れを落とす
③ 利益をドクセンする
④ 言葉のヘンセンを調べる
⑤ センスイカンに乗る

問2　傍線部A「講義というような、学生には日常的なものでさえ、素朴に不変な実在とは言いにくい。」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① ありふれた講義形式の授業でも、授業者の冒頭の宣言によって学生が授業内容の暗記をこころがけていくように、学習の場における受講者の目的意識と態度は、授業者の働きかけによって容易に変化していくものであるから。

② ありふれた講義形式の授業でも、授業者の冒頭の宣言がなければ学生にとっての授業の捉え方がさまざまに異なるように、私たちの理解する世界は、その解釈が多様な可能性をもっており、一つに固定されたものではないから。

③ ありふれた講義形式の授業でも、授業者の冒頭の宣言がなければ学生の授業の聴き方は一人ひとり異なるように、授業者の教授上の意図的な工夫は、学生の学習効果に大きな影響を与えていくものであるから。

④ ありふれた講義形式の授業でも、授業者の冒頭の宣言がなければ学生にとって授業の目的が明確には意識されないように、私たちを取り巻く環境は、多義性を絞り込まれることによって初めて有益な存在となるものであるから。

⑤ ありふれた講義形式の授業でも、授業者の冒頭の宣言によって学生のふるまいが大きく変わってしまうように、特定の場におけるひとやモノや課題の間の関係は、常に変化していき、再現できるものではないから。

問3　傍線部**B**「図1のように」とあるが、次に示すのは、四人の生徒が本文を読んだ後に**図1**と**図2**について話している場面である。本文の内容をふまえて、空欄に入る最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

生徒A――たしかに湯飲み茶碗に**図1**のように持ち手をつければ、珈琲カップとして使うことができるようになるね。

生徒B――それだけじゃなく、湯飲み茶碗では運ぶときに重ねるしかないけど、持ち手があれば**図2**みたいに指を引っ掛けて持つことができるから、一度にたくさん運べるよ。

生徒C――それに、湯飲み茶碗は両手で支えて持ち運ぶけど、持ち手があれば片手でも運べるね。

生徒D――でも、湯飲み茶碗を片手で持つこともできるし、一度にたくさん運ぶ必要がなければ珈琲カップを両手で支えて持つことだってできるじゃない。

生徒B――なるほど。指で引っ掛けて運べるようになったからといって、たとえウェイターであっても、常に**図2**のような運び方をするとは限らないね。

生徒A――では、デザインを変えたら、変える前と違った扱いをしなきゃいけないわけではないってことか。

生徒C――それじゃ、デザインを変えたら扱い方を必ず変えなければならないということではなくて、［　　］ということになるのかな。

生徒D――そうか、それが、「今とは異なるデザインを共有する」ことによって、「今ある現実の別のバージョンを知覚する」ことになるってことなんだ。

生徒C――まさにそのとおりだね。

① どう扱うかは各自の判断に任されていることがわかる
② デザインが変わると無数の扱い方が生まれることを知る
③ ものの見方やとらえ方を変えることの必要性を実感する
④ 立場によって異なる世界が存在することを意識していく
⑤ 形を変える以前とは異なる扱い方ができることに気づく

問4　傍線部C「このことは人間を記述し理解していく上で、大変重要なことだと思われる。」とあるが、どうしてそのように考えられるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 現実は、人間にとって常に工夫される前の状態、もしくはこれから加工すべき状態とみなされる。そのため、人間を記述し理解する際には、デザインされる以前の自然状態を加工し改変し続けるという人間の性質をふまえることが重要になってくるから。

② 現実は、どうしようもないと思われた運命や限界を乗り越えてきた、人間の工夫の跡をとどめている。そのため、人間を記述し理解する際には、自然のもたらす形状の変化に適合し、新たな習慣を創出してきた人間の歴史をふまえることが重要になってくるから。

③ 現実は、自分たちが生きやすいように既存の秩序を改変してきた、人間の文化的実践によって生み出された場である。そのため、人間を記述し理解する際には、自分たちの生きる環境に手を加え続けてきた人間の営為をふまえることが重要になってくるから。

④ 現実は、特定の集団が困難や支障を取り除いていく中で形づくられた場である。そのため、人間を記述し理解する際には、環境が万人にとって価値中立的なものではなく、あつらえられた世界でしか人間は生きられないという事実をふまえることが重要になってくるから。

⑤ 現実は、人工物を身の丈に合うようにデザインし続ける人間の文化的実践と、必然的に対応している。そのため、人間を記述し理解する際には、デザインによって人工物を次から次へと生み続ける、人間の創造する力をふまえることが重要になってくるから。

問5　傍線部D「『心理　学（しんりダッシュがく）』の必要性」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 人間が文化歴史的条件と分離不可能であることに自覚的ではない心理学は、私たちのこころの現象を捉えるには不十分であり、自らがデザインした環境の影響を受け続ける人間の心理を基本的条件とし、そのような文化と心理とを一体として考える「心理　学」が必要であるということ。

② 人工物に媒介されない行為を無印の行為とみなし、それをもともとの原行為と想定して私たちのこころの現象を捉えるこれまでの心理学に代わって、人工物化された新たな環境に直面した際に明らかになる人間の心理を捕捉して深く検討する「心理　学」が今後必要であるということ。

③ 価値中立的な環境に生きる動物と文化的意味や価値に満ちた環境に生きる人間との決定的な隔たりに対して、従来の心理学は無関心であったため、心理学実験室での人間の「記憶」を動物実験で得られた動物の「記憶」とは異なるものとして認知し研究する「心理　学」が必要であるということ。

④ 私たちのこころの現象を文化歴史的条件と切り離した現象として把握し、それを主要な研究対象としてきた既存の心理学よりも、環境をデザインし続ける特質を有する人間の心性を、文化歴史的に整備されたデフォルトの環境デザインに対応させて記述する「心理　学」の方が必要であるということ。

⑤ ある行い（「行為」）の結果と別の行い（「行為」）の結果とが同じ場合には両者の差異はないものとして処理する心理学の欠点を正し、環境をデザインし続ける人間の心性と人間の文化的実践によって変化する現実とを集合体として考えていく「心理　学」が必要であるということ。

問6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の第 1 ～ 8 段落の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

① 第 1 段落の「これから話す内容をどの程度理解できたか、後でテストをする」は、会話文から文章を始めることで読者を話題に誘導し、後から状況説明を加えて読者の理解を図っている。

② 第 3 段落の「講義とは何か。大きな四角い部屋の空気のふるえである。」は、講義の語りの部分について、教室の中で授業者の口から発せられた音声の物理的な現象面に着目して表現している。

③ 第 6 段落の「新しい古典」は、紹介されている著作について、発表後それほどの時間を経過していないが、その分野で広く参照され、今後も読み継がれていくような書物であることを表している。

④ 第 8 段落の「私たちはこうした～考える。」と、「～、私たちは繰り返してきたのだ。」の「私たち」は、両方とも、筆者と読者とを一体化して扱い、筆者の主張に読者を巻き込む効果がある。

(ii) この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

① この文章は、冒頭で具体例による問題提起を行い、次に抽象化によって主題を展開し、最後に該当例を挙げて統括を行っている。

② この文章は、個別の具体例を複数列挙して共通点を見出し、そこから一般化して抽出した結論をまとめ、主張として提示している。

③ この文章は、導入部で具体例の報告を行い、展開部で筆者の主張と論拠を述べ、結論部で反対意見への反論と統括とを行っている。

④ この文章は、個別の例を提示して具体的に述べることと、抽象度を高めてその例を捉え直すこととを繰り返して論点を広げている。

第2問

次の文章は、井上荒野の小説「キュウリいろいろ」の一節である。郁子は三十五年前に息子を亡くし、以来夫婦ふたり暮らしだったが、昨年夫が亡くなった。以下は、郁子がはじめてひとりでお盆を迎える場面から始まる。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。（配点　50）

おいしいビールを飲みながら、郁子は楊枝をキュウリに刺して、二頭の馬(注1)を作った。本棚に並べた息子と夫の写真の前に置く。

キュウリで作るのは馬、茄子で作るのは牛の見立てだという。郁子は田舎の生まれだから、実家の立派な仏壇にも、お盆の頃には提灯と一緒にそれらが飾られていた。足の速い馬は仏様がこちらへ来るときに、足の遅い牛は仏様が向こうへ戻るときに乗っていただくのだという。

実家を出てからも、郁子は毎年それを作ってきた。三十五年間――息子の草が亡くなってからずっと。

馬に乗って帰ってきてほしかったし、一緒に連れていってほしかった。あるときそれを夫に打ち明けてしまったことがある。キュウリの馬を作っていたら、君はほんとにそういうことを細々と熱心にやるねと、からかう口調で言われて、なんだか妙に腹が立ったのだ。あの子と一緒に乗っていけるように、立派な馬を作ってるのよ。言った瞬間に後悔したが、遅かった。俊介は何も言い返さなかった。ただ、それまでの無邪気な微笑みがすっと消えて、暗い、寂しい顔になった。

後悔はしたのだ、いつも。だがなぜか再び舌が勝手に動いて、憎まれ口が飛び出す。そういうことが幾度もあった。俊介はたまったものではなかっただろう。いつも黙り込むだけだったが、いちどだけ(ア)腹に据えかねたのか「別れようか」と言われたことがあった。

別れようか。俺と一緒にいることが、そんなにつらいのなら……。

いやよ。郁子は即座にそう答えた。とうとう夫がその言葉を言ったということに(イ)戦きながら、でもその衝撃を悟られまいと虚勢を張って。

あなたは逃げるつもりなのね？　そんなの許さない。わたしは絶対に別れない。

震える声を抑えながら、そう言った。それは本心でもあった。息子の死、息子の記憶に、ひとりでなんかとうてい耐えきれるはずがなかった。だから昨年、俊介が死んでしまったときは、怒りがあった。とうとう逃げたのね、と感じた。怒りは悲しみよりも大きいようで、どうしていいかわからなかった。

郁子はビールを飲み干すと、息子の写真を見、それから夫の写真を見た。キュウリの馬は、それぞれにちゃんと一頭ずつ作ったのだった。帰りの牛がないけれど、べつに帰らなくたっていいわよねえ、と思う。馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい。

A 写真の俊介が苦笑したように見えた。亡くなる少し前、友人夫婦と山へ行ったときのスナップ(注2)。会話しながら笑っている顔。いかにも愉(たの)しげなゆったりとした表情をしているが、あとから友人にあれはあなたと喋(しゃべ)っているときよと教えられた。嘘(うそ)だわと思い、本当かしらとも思った。

数日前の同級生からの用件は、俊介の写真を借りたい、というものだった。名簿は一ページを四人で分割する形にして、本人が書いた簡単なプロフィールとともに、高校時代のスナップと、現在の写真を並べて載せたいのだという。この写真を貸すことはできるが、そうしたら返ってくるまでの間、書棚の額の片方が空になってしまう。

そのことが目下の懸案事項なのだった。写真を探さなければならない、と郁子は思った——じつのところ、この数日ずっとそう思っていた。夫と暮らした約四十年間の間に撮ったり、撮られたりして溜(た)まったスナップ写真は、押し入れの下段の布張りの箱に収まっている。箱の上には俊介が整理したアルバムも三冊ある。あれを取り出してみなければ。郁子はそう考え、なんだかもうずっと前、三十年も四十年も前から、そのことばかり考え続けていたような気がした。

お盆にしては空(す)いてるわね、と思った電車は乗り継ぐほどに混んできた。郁子が向かう先は都下とはいっても西の端の山間部だから、帰省する人もいるだろうし遊びに行く人もいるのだろう。

リュックを背負った中高年の一団に押し込まれるように車内の奥に移動すると、**B**少し離れた場所に座っていた若い女性がぱっと立ち上がり、わざわざ郁子を呼びに来て、席を譲ってくれた。どうもありがとう。やや面食らいながらお礼を言って、ありがたく腰を下ろした。

女性は、彼女の前に立っていた男性と二人連れらしかった。郁子が座ると、気を遣わせまいとしてか二人は離れた場所へ移動していった。恋人同士か、夫婦になったばかりの二人だろう。

三十数年前、ちょうど今の女性くらいの年の頃、同じこの電車に乗って同じ場所を目指していたことがあった。時間もちょうど同じくらい——午前九時頃。あのときも郁子は席を譲られたのだった。譲ってくれたのは年配の男性だった。男性の妻が郁子の隣に座っていたので、男性はそのままそこにいた。二人の女性が座り、向き合って二人の男性が立っているというかたちになって、四人でいくらかの言葉を交わした。何ヶ月くらいですか？　と男性の妻が郁子に訊ね、四ヶ月ですと郁子は答えた。よくおわかりになりましたね、と俊介が単純に不思議がっている口調で言った。郁子のお腹はまだほとんど目立たない頃だったから。経験者ですから、と男性の妻は笑い、奥さんじゃなくてご主人の様子を見ていればわかります、と男性が笑ったのだった。

山の名前の駅に着き、リュックサックの人たちが降りると、車内はずいぶん見通しがよくなった。気のせいかもしれないが温度も幾分下がったように感じられる。郁子は膝の上のトートバッグから封筒を取り出した。封筒の中には俊介の写真が十数枚入っている。

結局、本棚の上の遺影はそのままにしておくことにして、名簿用にはこの十数枚の中のどれかを使ってもらうつもりだった。もっとも十数枚を持ってきたのは、今日これから会う約束をしている俊介の元・同級生に見せるためというよりは、自分のためかもしれない。じつのところ、押し入れから箱を取り出しその蓋をとうとう開けてからというもの、写真を眺めるのは毎晩の日課のようになっていた。写真なんて見たくない、見ることなんてできない、とずっと意固地になっていたのに、ひとたびその(ウ)枷が外れると、幾度繰り返し見ても足りなかった。

持ってきた写真は、結婚したばかりの若い頃のから、亡くなった年のものまでに渡っている(なるべく最近の写真を、という

のが電話してきた同級生の希望だったのだから、彼のためではないことはやはりあきらかだ)。食事をしている俊介、海の俊介、山の俊介、草を抱く俊介、寺院の前の俊介、草原の俊介、温泉旅館の浴衣を着た俊介。どの俊介もカメラに向かって照れくさそうに微笑み、そうでないときは——本人に気づかれずに誰かが撮影したのだろう——いかにも愉しげに笑ったり、あるいはどこか子供みたいな熱心な顔で、何かを注視したり、誰かの言葉に耳を傾けたりしている。

郁子にとっては驚きだった。もちろん喧嘩の最中や、不機嫌な顔をしているときにわざわざ写真を撮ったりはしないものだが、それにしてもこんなに幸福そうな俊介の写真が、これほどたくさんあるなんて。しかもそういう写真は、草がいた頃だけでなく、そのあとも撮られているのだった。

たしかに草が亡くなってしばらくは二人とも家にじっと閉じこもり、写真を撮ることにも撮られることにも無縁だった。それでもいつしか外に出て行くようになり、そうして笑うようにもなっていったのだ。植物が伸びるように人間は生きていく以上は笑おうとするものだ。そんなことはわかっている、と思っていたが、そのことをあらためて写真の中にたしかめると、それはやはり強い驚きになった。当然のこととして何枚かの写真には郁子自身も写っていた。やはり笑って。俊介と顔を見合わせて微笑み合っている一枚すらある。**C** 郁子はまるで見知らぬ誰かを見るようにそれらを眺め、それが紛れもない自分と夫であることを何度でもたしかめた。

「鹿島さん？　でしょ？」

俊介の元・同級生の石井さんに、改札口を出たら電話をかけることになっていたが、公衆電話を探そうとしているところに声をかけられた。石井さんは、見事な白髪の上品そうな男性だった。

「今時携帯電話を持ってないなんて、いかにも俊介の奥さんらしいですから」

すぐわかりましたよ、と石井さんは笑った。

「お盆休みにお呼びだてしてごめんなさい」

石井さんの感じの良さにほっとしながら、郁子は謝った。

「いやいや、お呼びだてしたのはこちらですよ。わざわざ写真を持ってきていただいたんですから。それにもう毎日が休みみたいなものだから、盆休みといったってとりたてて予定もありませんしね。お申し出に、大喜びで参上しました」

写真は自分でそちらへ持っていきたい、そのついでに、俊介が若い日を過ごしたあちこちを訪ねて歩きたいのだ、と郁子は石井さんに言ったのだった。石井さんに写真を渡したら自分ひとりでぶらぶら歩くつもりでいたのだが、石井さんは案内する気満々でやってきたようだった。

「第一、こんな炎天下に歩きまわったら倒れますよ」

駅舎の外に駐めてあった自転車に跨がった石井さんは、「どうぞ」と当たり前のようにうしろの荷台を示した。郁子はちょっとびっくりしたけれど、乗せてもらうことにした。

「まず僕らの母校へ行ってから、名所旧跡を通って駅のほうへ帰ってきましょう。なに、あっという間ですよ」

トートバッグを前のカゴに入れてもらい、郁子は荷台に横座りした(さすがに初対面の男性の腰に腕を巻きつけることはできなくて、遠慮がちにサドルの端を摑んだ)。自転車は風を切って走り出した。たしかに炎天ではあったが、石井さんは上手に日陰を選んで走ったので、さほど暑さは感じなかった。アスファルトより土が多い町だから、気温が都心よりも低いということもあるのかもしれない。

「この町ははじめてですか?」

「いいえ……彼と一緒になったばかりの頃に一度だけ」

それ以後、一度も来訪することはなかったのだった。広い庭がある古い木造の家に当時ひとり暮らしだった義母は、それから数年後に俊介の兄夫婦と同居することになり、家と土地は売却されたから。そのたった一度の機会も、郁子が妊娠中だったこともあり駅から俊介の実家へ行く以外の道は通らなかった。それでも今、自転車のスピードに合わせて行き過ぎる風景のところどころに、懐かしさや既視感を覚えて郁子ははっと目を見開いた。

十分も走らないうちに学校に着いた(それでも自分の足で歩いたら三十分はかかっただろうから、郁子は石井さんの好意にあらためて感謝した)。ケヤキや銀杏(いちょう)の大木がうっそうと繁(しげ)る向こうに、広々した校庭と、すっきりした鉄筋の建物が見える。校庭では女生徒たちがハードルの練習をしている。二十年くらい前に共学になって、校舎も建て替えたんですよね、と石井さんが言った。

しばらく外から眺めてから、正門から正面の校舎まで続くケヤキ並木を通り、屋根の下をくぐり抜けて裏門へ出た。守衛さんに事情を話せば校内の見学もできるだろうと石井さんは言ったが、**D**その必要はありませんと郁子は答えた。何かを探しに来たわけではなかったし、もしそうだとしても、もうそれを見つけたような感覚があった。

見事なケヤキの並木のことは、かつて俊介から聞いていた。高校時代俊介はラグビー部だったことや、女子校の生徒と交換日記をつけていたことも。何かの拍子にそういう話を聞かされるたびに、その時代の俊介に会ってみたい、と思ったものだった。

そして頭の中に思い描いていた男子校の風景が、今、自分の心の中から取り出されて、眼前にあらわれたのだという気がした。それが、ずっと長い間——夫を憎んだり責めたりしている間も——自分の中に保存されていたということに郁子は呆然(ぼうぜん)とした。呆然としながら、詰め襟の学生服を着た十六歳の俊介が、ハードルを跳ぶ女子学生たちを横目に見ながら校庭を横切っていく幻を眺めた。

(注) 1 馬——お盆の時に、キュウリを使って、死者の霊が乗る馬に見立てて作るもの。

2 スナップ——スナップ写真のこと。人物などの瞬間的な動作や表情を撮った写真。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14 。

(ア) 腹に据えかねた 12

① 本心を隠しきれなかった
② 我慢ができなかった
③ 合点がいかなかった
④ 気配りが足りなかった
⑤ 気持ちが静まらなかった

(イ) 戦(おのの)きながら 13

① 勇んで奮い立ちながら
② 驚いてうろたえながら
③ 慌てて取り繕いながら
④ あきれて戸惑いながら
⑤ ひるんでおびえながら

(ウ) 枷(かせ)が外れる 14

① 問題が解決する
② 苦しみが消える
③ 困難を乗り越える
④ いらだちが収まる
⑤ 制約がなくなる

問2　傍線部A「写真の俊介が苦笑したように見えた。」とあるが、そのように郁子に見えたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① キュウリで馬を作る自分に共感しなかった夫を今も憎らしく思っているが、そんな自分のことを、夫は嫌な気持ちを抑えて笑って許してくれるだろうと想像しているから。

② 自分が憎まれ口を利いても、たいていはただ黙り込むだけだったことに、夫は後ろめたさを感じながら今も笑って聞き流そうとしているだろうと想像しているから。

③ かつては息子の元へ行きたいと言い、今は息子も夫も自分のそばにいてほしいと言う、身勝手な自分のことを、夫はあきれつつ受け入れて笑ってくれるだろうと想像しているから。

④ 亡くなった息子だけでなく夫の分までキュウリで馬を作っている自分のことを、以前からかったときと同じように、夫は今も皮肉交じりに笑っているだろうと想像しているから。

⑤ ゆったりとした表情を浮かべた夫の写真を見て、夫に甘え続けていたことに今さら気づいた自分の頼りなさを、夫は困ったように笑っているだろうと想像しているから。

問3　傍線部B「少し離れた場所に座っていた若い女性がぱっと立ち上がり、わざわざ郁子を呼びに来て、席を譲ってくれた」とあるが、この出来事をきっかけにした郁子の心の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① 三十数年前にも年配の夫婦が席を譲ってくれたことを思い起こし、他人にもわかるほど妊娠中の妻を気遣っていた夫とその気遣いを受けていたあの頃の自分に思いをはせている。

② 席を譲ってくれた年配の夫婦と気兼ねなく話した出来事を回想し、いま席を譲ってくれた女性が気を遣わせまいとわざわざ離れた場所に移動したことに感謝しつつも、物足りなく思っている。

③ まだ席を譲られる年齢でもないと思っていたのに譲られたことに戸惑いを感じつつ、以前同じように席を譲ってくれた年配の男性の優しさを思い起こし、若くて頼りなかった夫のことを懐かしんでいる。

④ 席を譲ってくれた女性と同じくらいの年齢のときにも、同じくらいの時間帯に同じ場所を目指して、夫と電車に乗っていて席を譲られたことを思い出し、その不思議な巡り合わせを新鮮に感じている。

⑤ 若い女性が自分に席を譲ってくれた配慮が思いもかけないことだったので、いささか慌てるとともに、同じようなことが夫と同行していた三十数年前にもあったのを思い出し、時の流れを実感している。

問4　傍線部C「郁子はまるで見知らぬ誰かを見るようにそれらを眺め、それが紛れもない自分と夫であることを何度でもたしかめた。」とあるが、その時の郁子の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 息子を亡くした後、二人は悲しみに押しつぶされ、つらい生活を送ってきた。しかし、写真の二人からはそのような心の葛藤は少しも見いだすことができず、そこにはどこかの幸せな夫婦が写っているとしか思われなかった。

② 息子を亡くした悲しみに耐えて明るく振る舞っていた夫から、距離をとりつつ自分は生きてきたと思っていた。しかし、案外自分も同様に振る舞い、夫に同調していたことを、写真の中に写った自分たちの姿から思い知った。

③ 息子の死後も明るさを失わない夫に不満といらだちを抱いていたが、そんな自分も時には夫のたくましさに助けられ、夫とともに明るく生きていた。写真に写った自分たちのそのような様子は容易には受け入れがたく思われた。

④ 息子の死にとらわれ、悲しみのうちに閉じこもるようにして夫と生きてきたと思っていたが、自分も夫も知らず知らず幸福に向かって生きようとしていた。写真に写るそんな自分たちの笑顔は思いがけないものだった。

⑤ 息子の死に打ちのめされた二人は、ともに深い悲しみに閉ざされた生活を送ってきた。互いに傷つけ合った記憶があざやかであるだけに、写真に残されていた幸福そうな姿が自分たちのものとは信じることができなかった。

問5　傍線部D「その必要はありませんと郁子は答えた」とあるが、このように答えたのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

① 夫の実家のある町並みを経て、彼が通った高校まで来てみると、校内を見るまでもなく若々しい夫の姿がありありと見えてきた。今まで夫を憎んでいると思い込んでいたが、その幻のあまりのあざやかさから、夫をいとおしむ心の強さをあらためて確認することができたから。

② 自分の心が過去に向けられ、たった一度来たきりで忘れたものと思っていた目の前の風景にも懐かしさや既視感を覚えるほどだった。高校時代から亡くなるまでの夫の姿が今や生き生きとよみがえり、大切なことは記憶の中にあるのだと認識することができたから。

③ 夫が若い頃過ごした町並みや高校を訪ねるうちに、いさかいの多かった暮らしの中でも、夫のなにげない思いや記憶を受け止め、夫の若々しい姿が自分の中に刻まれていたことに気がついた。そのような自分たち夫婦の時間の積み重なりを実感することができたから。

④ 長年夫を憎んだり責めたりしていたが、夫が若い日々を過ごした町並みを確認してゆくうちに、ようやく許す心境に達し、夫への理解も深まった。目の前にあらわれた若い夫の姿に、夫への感謝の念と、自分の新しい人生の始まりを予感することができたから。

⑤ 長く苦しめながら頼りにもしてきた夫が、学生服姿の少年として眼前にあらわれ、今は彼のことをいたわってあげたいという穏やかな心境になった。自分と夫は重苦しい夫婦生活からようやく解放されたのだということを、若き夫の幻によって確信することができたから。

問6　この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 19 ・ 20 。

① 1行目から69行目は12行目の俊介の言葉を除いて「　」がないが、71行目から92行目は郁子と石井の会話に「　」が使われ、93行目以降また使われなくなる。「　」のない部分は郁子の思考の流れに沿って文章が展開している。

② 22行目「馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい。」は、郁子の心情が「郁子は～と思った」などの語句を用いずに「わたし」という一人称で直接述べられている。これは郁子のその場での率直な思いであることを印象づける表現である。

③ 56行目、87行目、97行目では郁子の心情が（　）の中に記されている。ここでは、（　）の中に入れることによって、その内容が他人に隠したい郁子の本音であることが示されている。

④ 57行目「食事をしている俊介、海の俊介、山の俊介、草を抱く俊介、寺院の前の俊介、草原の俊介、温泉旅館の浴衣を着た俊介。」の一文には一枚一枚の写真の中の俊介の様子が「～俊介」の反復によって羅列されている。これによって、夫のさまざまな姿に郁子が気づいたということが表現されている。

⑤ 「名所旧跡」という語は、本来、有名な場所や歴史的事件にゆかりのある場所を表すが、86行目の「名所旧跡」は、俊介という個人に関わりのある場所として用いられている。この傍点は、石井が、あえて本来の意味を離れ、冗談めかしてこの語を使ったことを示している。

⑥ 93行目「一度も来訪することはなかったのだった」の「のだった」や、105行目「その時代の俊介に会ってみたい、と思ったものだった」の「ものだった」は、回想において改めて思い至ったことを確認する文末表現である。前者には郁子の悔やんでいる気持ちがあらわれており、後者には懐かしむ気持ちがあらわれている。

第3問　次の文章は『石上私淑言』の一節で、本居宣長が和歌についての自身の見解を問答体の形式で述べたものである。これを読んで、後の問い(**問1**～**6**)に答えよ。(配点　50)

問ひて云はく、**A**恋の歌の世に多きはいかに。

答へて云はく、まづ『古事記』『日本紀』(注1)に見えたるいと上つ代の歌どもをはじめて、代々の集どもにも、恋の歌のみことに多かる中にも、『万葉集』には相聞とあるが恋にて、すべての歌を雑歌、相聞、挽歌(注2)と三つに分かち、八の巻、十の巻などには四季の雑歌、四季の相聞と分かてり。かやうに他をばすべて雑といへるにて、歌は恋をむねとすることを知るべし。そもいかなればかくあるぞといふに、恋はよろづのあはれにすぐれて深く人の心にしみて、いみじく堪へがたきわざなるゆゑなり。されば、すぐれてあはれなるすぢは常に恋の歌に多かることなり。

問ひて云はく、おほかた世の人ごとに常に深く願ひ忍ぶことは、色を思ふよりも、身の栄えを願ひ財宝を求むる心などこそは、(ア)あながちにわりなく見ゆめるに、などてさるさまのことは歌に詠まぬぞ。

答へて云はく、**B**情と欲とのわきまへあり。まづすべて人の心にさまざま思ふ思ひは、みな情なり。その思ひの中にも、とあらまほしかくあらまほしと求むる思ひは欲といふものなり。されば、この二つはあひ離れぬものにて、なべては欲も情の中の一種なれども、またとりわきては、人をあはれと思ひ、かなしと思ひ、あるはうしともつらしとも思ふやうの類をなむ情とはいひける。さるはその情より出でて欲にもわたり、また欲より出でて情にもわたりて、一様ならずとりどりなるが、(イ)いかにもあれ、歌は情の方より出で来るものなり。これ、情の方の思ひは物にも感じやすく、あはれなることこよなう深きゆゑなり。欲の方の思ひはひとすぢに願ひ求むる心のみにて、さのみ身にしむばかり細やかにはあらねばにや、はかなき花鳥の色音にも涙のこぼるるばかりは深からず。かの財宝をむさぼるやうの思ひは、この欲といふものにて、物のあはれなるすぢにはうときゆゑに歌は出で来ぬなるべし。色を思ふも本は欲より出づれども、ことに情の方に深くかかる思ひにて、生きとし生けるもののまぬか

れぬところなり。まして人はすぐれて物のあはれを知るものにしあれば、ことに深く心に染(そ)みて、あはれに堪へぬはこの思ひなり。その他もとにかくにつけて物のあはれなることには、歌は出で来るものと知るべし。

さはあれども、情(注3)の方は前にいへるやうに、心弱きを恥づる後の世のならはしにつつみ忍ぶこと多きゆゑに、かへりて欲より浅くも見ゆるなめり。されど、この歌のみは上つ代の心ばへを失はず。人の心のまことのさまをありのままに詠みて、めめしう心弱き方をもさらに恥づることなければ、後の世に至りて優になまめかしく詠まむとするには、いよいよ物のあはれなる方をのみむねとして、かの欲のすぢはひたすらにうとみはてて、詠まむものとも思ひたらず。

まれまれにもかの『万葉集』の三の巻に「酒(注4)を讃(ほ)めたる歌」の類よ、詩(注5)には常のことにて、かかる類のみ多かれど、歌にはいと心づきなく憎くさへ思はれて、(ウ)さらになつかしからず。何の見所も無しかし。これ、欲はきたなき思ひにて、あはれならざるゆゑなり。しかるを人の国には、あはれなる情をば恥ぢ隠して、きたなき欲をしもいみじきものにいひ合へるはいかなることぞや。

（注）
1 『日本紀』――『日本書紀』のこと。
2 挽歌――死者を哀悼(あいとう)する歌のこと。
3 情の方は前にいへるやうに――この本文より前に「情」に関する言及がある。
4 酒を讃めたる歌――大伴旅人(おおとものたびと)が酒を詠んだ一連の歌のこと。
5 詩――漢詩のこと。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 21 ～ 23 。

(ア) あながちにわりなく 21

① ひたむきで抑えがたく
② かえって理不尽に
③ なんとなく不合理に
④ ややありきたりに
⑤ どうしようもなく無粋に

(イ) いかにもあれ 22

① 言うまでもなく
② そうではあるが
③ どのようであっても
④ どういうわけか
⑤ どうにかしてでも

(ウ) さらになつかしからず 23

① あまり共感できない
② どうにも思い出せない
③ なんとなく親しみがわかない
④ ますます興味がわかない
⑤ 全く心ひかれない

問2　波線部「身にしむばかり細やかにはあらねばにや」についての文法的な説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① 打消の助動詞「ず」が一度用いられている。
② 断定の助動詞「なり」が一度用いられている。
③ 仮定条件を表す接続助詞「ば」が一度用いられている。
④ 疑問を表す係助詞「や」が一度用いられている。
⑤ 格助詞「に」が一度用いられている。

問3　傍線部A「恋の歌の世に多きはいかに」とあるが、この問いに対して、本文ではどのように答えているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① 恋の歌が多い『万葉集』の影響力が強かったため、『万葉集』以後の歌集でも恋の歌は連綿と詠まれ続けてきた。

② 人の抱くいろいろな感慨の中でも特に恋は切実なものなので、恋の歌が上代から中心的な題材として詠まれている。

③ 相手への思いをそのまま言葉にしても、気持ちは伝わりにくいので、昔から恋心は歌に託して詠まれてきた。

④ 恋の歌は相聞歌のみならず四季の歌の中にもあるため、歌集内の分類による見かけの数以上に多く詠まれている。

⑤ 自分の歌が粗雑であると評価されることを避けるあまり、優雅な題材である恋を詠むことが多く行われてきた。

問4　傍線部B「情と欲とのわきまへ」と恋との関係について、本文ではどのように述べているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① 「情」と「欲」はいずれも恋に関わる感情であり、人に深い感慨を生じさせる。ただし、悲しい、つらいといった、自分自身についての思いを生じさせるものが「情」であるのに対し、哀れだ、いとしいといった、恋の相手についての思いを生じさせるものが「欲」である。恋において「情」と「欲」は対照的な関係にあると言える。

② 「情」は「欲」を包含する感情であるが、両者を強いて区別すれば、「情」は何かから感受する受動的なものである。これに対して「欲」は何かに向かう能動的な感情であり、その何かを我がものにしたいという行為を伴う。したがって、恋は「情」からはじまり、やがて「欲」へと変化する。

③ 人の心に生まれるすべての思いは「情」であるが、特には、誰かをいとしく思ったり鳥の鳴き声に涙したりするなど、身にしみる細やかな思いを指す。一方、我が身の繁栄や財宝を望むなど、何かを願い求める思いは「欲」にあたる。恋は「欲」と「情」の双方に関わる感情だが、「欲」よりも「情」に密接に関わっている。

④ 人の心に生じる様々な感情はすべて「情」である。一方、「欲」は何かを願い求める感情のことであり、「情」の中の一つに過ぎない。もともと恋は誰かと一緒にいたいという「欲」に分類される感情だが、恋を成就させるには「欲」だけではなく様々な感情が必要なので、「情」にも通じるべきである。

⑤ 「情」は自然を賛美する心とつながるものであり、たいへん繊細な感情である。しかし、「欲」は自然よりも人間の作った価値観に重きを置くので、経済的に裕福になることをひたすら願うことになる。恋は花や鳥を愛するような心から生まれるものであって、「欲」を源にすることはない。

問5　「情」と「欲」の、時代による違いと歌との関係について、本文ではどのように述べているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 人の「情」のあり方は上代から変わっていないが、「欲」のあり方は変わった。恋の歌は「情」と「欲」の両者に支えられているため、後世の恋の歌は、上代の恋の歌とは性質を異にしている。

② 「情」は「欲」に比べると弱々しい感情なので、時代が経つにつれて人々の心から消えていった。しかし、歌の世界においては伝統的に「情」が重んじられてきたので、今でも歌の中にだけは「情」が息づいている。

③ 人は恋の歌を詠むときに自らの「情」と向き合うため、恋の歌が盛んだった時代には、人々の「情」も豊かにはぐくまれた。後世、恋の歌が衰退してくると、人々の「情」は後退し、「欲」が肥大してしまった。

④ 「情」は「欲」より浅いものと見られがちであるが、これは後世において「情」を心弱いものと恥じて、表に出さないようになったからである。しかし、歌の世界においては上代から一貫して「情」を恥じることがなかった。

⑤ 『万葉集』に酒を詠んだ歌があるように、歌はもともとは「欲」にもとづいて詠まれていた。しかし、しだいに「情」を中心に据えて優美な世界を詠まねばならないことになり、『万葉集』の歌が振り返られることはなくなった。

問6　歌や詩は「物のあはれ」とどのように関わっているのか。本文での説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

① 歌は「物のあはれ」を動機として詠まれ、詩は「欲」を動機として詠まれる。しかし、何を「あはれ」の対象とし、何を「欲」の対象とするかは国によって異なるので、歌と詩が同じ対象を詠むこともあり得る。

② 上代から今に至るまで、人は優美な歌を詠もうとするときに「物のあはれ」を重視してきたが、一方で、詩の影響を受けるあまり、「欲」を断ち切れずに歌を詠むこともあった。

③ 歌は「物のあはれ」に関わる気持ちしか表すことができない。そこで、一途（いちず）に願い求める気持ちを表すときは、歌に代わって詩が詠まれるようになった。

④ 「情」は生きている物すべてが有するものだが、とりわけ人は「物のあはれ」を知る存在である。歌は「物のあはれ」から生まれるものであって、「欲」を重視する詩とは大きな隔たりがある。

⑤ 歌も詩も「物のあはれ」を知ることから詠まれるが、詩では、「物のあはれ」が直接表現されることを恥じて避ける傾向があるため、簡単には「物のあはれ」を感受できない。

第4問 次の文章を読んで、後の問い（**問1～6**）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50）

嘉(注1)祐、禹(注2)偁子也。嘉祐平時若愚騃(注3)、独寇準(注4)知之。(I)準知開(注5)(II)封府、一日、問嘉祐曰、「外間議(X)準云何。」嘉祐曰、「外人皆云丈(注7)人旦(注8)夕入(注9)相。」準曰、「於吾(注10)子意何如。」嘉祐曰、「以愚(注11)観之、(A)丈人不若未為相。為相則誉望損矣。」準曰、「何故。」嘉祐曰、「自古賢相所以能建功業(Y)沢生(注12)民者、其君臣相得皆如(注13)魚之有水。故(B)言聴計従、而功名倶美。今丈人負天下重望、相則中外以太平責焉。丈人之於明(注14)主、能若魚之有水乎。(C)嘉祐所以恐誉望之損也。」準喜、起執其手曰、「元(注15)之雖文章冠天下、至

於深識遠慮、D殆不レ能レ勝二吾子一也。」

（李燾『続資治通鑑長編』による）

（注）
1 嘉祐――王嘉祐。北宋の人。
2 禹偁――王禹偁。王嘉祐の父で、北宋の著名な文人。
3 愚騃――愚かなこと。
4 寇準――北宋の著名な政治家。
5 開封府――現在の河南省開封市。北宋の都であった。
6 外間――世間。
7 丈人――あなた。年長者への敬称。
8 旦夕――すぐに、間もなく。
9 入――朝廷に入って役職に就く。
10 吾子――あなた。相手への親しみをこめた言い方。
11 愚――私。自らを卑下する謙譲表現。
12 生民――人々。
13 如二魚之有一レ水――魚に水が必要であるようなものだ。君臣の関係が極めて良好であるさま。
14 明主――皇帝を指す。
15 元之――王禹偁の字。

問1　二重傍線部X「議」、Y「沢」の意味の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 29 。

① X 相談する　Y 水を用意する
② X 非難する　Y 田畑を与える
③ X 論評する　Y 恩恵を施す
④ X 礼賛する　Y 物資を供給する
⑤ X 批判する　Y 愛情を注ぐ

問2　波線部Ⅰ「知レ之」・Ⅱ「知二開 封 府一」の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 30 ・ 31 。

Ⅰ「知レ之」 30

① 王嘉祐が決して愚かな人物ではないことを知っていた
② 王嘉祐が乱世には非凡な才能を見せることを知っていた
③ 王嘉祐が世間の評判通り愚かであるということを知っていた
④ 王嘉祐が王禹偁の子にしては愚かなことを知っていた
⑤ 王嘉祐が王禹偁の文才を受け継いでいることを知っていた

Ⅱ「知二開 封 府一」 31

① 開封府の長官の知遇を得た
② 開封府には知人が多くいた
③ 開封府の知事を務めていた
④ 開封府から通知を受けた
⑤ 開封府で王嘉祐と知りあった

問3 傍線部A「丈 人 不 若 未 為 相。為 相 則 誉 望 損 矣」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 32 ・ 33 。

(i) 書き下し文 32

① 丈人に若(し)かずんば未だ相と為(な)らず。相と為れば則ち誉望損なはれんと

② 丈人未だ相の為(ため)にせざるに若かず。相の為にすれば則ち誉望損なはれんと

③ 丈人若(なんぢ)の未だ相と為らずんば不(あら)ず。相と為れば則ち誉望損なはれんと

④ 丈人未だ相と為らざるに若かず。相と為れば則ち誉望損なはれんと

⑤ 丈人に若かずんば未だ相の為にせず。相の為にすれば則ち誉望損なはれんと

(ii) 解釈 33

① 誰もあなたに及ばないとしたら宰相を補佐する人はいません。ただ、もし補佐する人が現れたら、あなたの名声は損なわれるでしょう。

② あなたはまだ宰相を補佐しないほうがよろしいでしょう。もし、あなたが宰相を補佐すれば、あなたの名声は損なわれるでしょう。

③ あなたはまだ宰相とならないほうがよろしいでしょう。もし、あなたが宰相となれば、あなたの名声は損なわれるでしょう。

④ あなたは今や宰相とならないわけにはいきません。ただ、あなたが宰相となれば、あなたの名声は損なわれるでしょう。

⑤ 誰もあなたに及ばないとしたら宰相となる人はいません。ただ、もし宰相となる人が現れたら、あなたの名声は損なわれるでしょう。

問4　傍線部B「言聴計従」とあるが、(i)誰の「言」「計」が、(ii)誰によって「聴かれ」「従はれ」るのか。(i)と(ii)との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

	(i)	(ii)
①	丈人	相
②	君	生民
③	賢相	君
④	明主	賢相
⑤	生民	明主

問5　傍線部C「嘉祐所以恐誉望之損也」とあるが、王嘉祐がそのように述べるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 宰相は寇準に対して天下を太平にしてほしいと期待するだろうが、もし寇準が昔の偉大な臣下より劣るとすれば太平は実現されず、宰相の期待は失われてしまうから。

② 人々は寇準に対して天下を太平にしてほしいと期待するだろうが、もし寇準が皇帝と親密な状態になれなければ太平は実現されず、彼らの期待は失われてしまうから。

③ 皇帝は寇準に対して天下を太平にしてほしいと期待するだろうが、もし寇準の政策が古代の宰相よりも優れていなければ太平は実現されず、皇帝の期待は失われてしまうから。

④ 人々は寇準に対して天下を太平にしてほしいと期待するだろうが、もし寇準が皇帝の意向に従ってしまえば太平は実現されず、彼らの期待は失われてしまうから。

⑤ 宰相は寇準に対して天下を太平にしてほしいと期待するだろうが、もし寇準が皇帝の信用を得られなければ太平は実現されず、宰相の期待は失われてしまうから。

問6　傍線部D「殆　不レ能レ勝二吾　子一也」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 王嘉祐は宰相が政治を行う時、どのように人々と向き合うべきかを深く知っている。したがって政治家としての思考の適切さという点では、父の王禹偁もおそらく王嘉祐にはかなわない。

② 王嘉祐は寇準の政治的立場に深く配慮し、世間の意見の大勢にはっきりと反対している。したがって意志の強さという点では、父の王禹偁もおそらく王嘉祐にはかなわない。

③ 王嘉祐は今の政治を分析するにあたり、古代の宰相の功績を参考にしている。したがって歴史についての知識の深さという点では、父の王禹偁もおそらく王嘉祐にはかなわない。

④ 王嘉祐は皇帝と宰相の政治的関係を深く理解し、寇準の今後の進退について的確に進言している。したがって見識の高さという点では、父の王禹偁もおそらく王嘉祐にはかなわない。

⑤ 王嘉祐は理想的君臣関係について深く考えてはいるものの、寇準に問われてはじめて自らの政治的見解を述べている。したがって言動の慎重さという点では、父の王禹偁もおそらく王嘉祐にはかなわない。

N

国　　語（200点満点）

問題番号(配点)	設問	解答番号	正解	配点	問題番号(配点)	設問	解答番号	正解	配点
第1問 (50)	1	1	2	2	第3問 (50)	1	21	1	5
		2	3	2			22	3	5
		3	5	2			23	5	5
		4	5	2		2	24	3	5
		5	2	2		3	25	2	6
	2	6	2	8		4	26	3	8
	3	7	5	8		5	27	4	8
	4	8	3	8		6	28	4	8
	5	9	1	8	第4問 (50)	1	29	3	5
	6	10	4	4		2	30	1	6
		11	4	4			31	3	6
第2問 (50)	1	12	2	3		3	32	4	5
		13	5	3			33	3	5
		14	5	3		4	34	3	7
	2	15	3	7		5	35	2	8
	3	16	1	8		6	36	4	8
	4	17	4	8	(注) ー(ハイフン)でつながれた正解は，順序を問わない。				
	5	18	3	8					
	6	19ー20	3ー6	10 (各5)					